

平成24年度第3回宮崎県社会教育委員会議 議事録

期日：平成24年10月19日(金)

午後2時～4時

会場：宮崎県総合博物館 研修室

テーマ 「親の学び」と「家族の絆づくり」について

協議題 親同士の学び合いや仲間づくりを通して、子育てに関心を持ち、親子のふれあいや親としての学びを深め、家庭の教育力の向上を図るための取組はどうあればよいか。

森山議長

「家族の絆づくり」を進めるためには、親が子どもの発達の特徴を理解することや親子のコミュニケーションづくりについて学ぶことが大切であると思う。

そこで初めに、「家読(うちどく)」と「親として必要な学びを応援する学習プログラム」について、事務局より説明をお願いする。

事務局

「家読(うちどく)」の推進について

- ・ 「家読」の目的は、本を読むことで、また、読んだ本の内容を通して、親子の会話を増やすということである。
- ・ 「家庭編」リーフレットと「学校用」マニュアルを作成して推進している。
- ・ 「家庭編」リーフレットには、具体的な実践事例として、「寝る前の10分間は読むようにしている」「ノーテレビ・ノーゲームで進めている」「料理本や折り紙作りに関する本をきっかけにして会話を増やしている」「家読カレンダーやノートに記録を書き込んでいる」など、取組の参考となるものを紹介している。
- ・ 読書は、文字や漢字を覚えること以外に、表現を覚えるという点でも大切である。高校生や大学生が就職試験を受ける際に、コミュニケーション能力が足りないと指摘されることがある。自分の気持ちを表す方法や美しい表現を知るなど、読書を通して身に付けられる大切なものがある。
- ・ 「学校用」マニュアルでは、学級における「リレー家読」の取組を紹介している。
- ・ 「みやざき学び応援ネット」からも検索できるようにしている。



「親として必要な学びを応援する学習プログラム」について

- ・ 教職員を対象としたアンケート調査の結果から「もう少し家庭の教育力を充実してほしい」という回答の割合が高かった。また、子どものことに関して、何もかも学校にお願いするという風潮も見られる。そこで、保護者に対して「親としての学び」が必要ではないかという提案をしたい。

- ・ 児童虐待などの問題も深刻になっており、将来の親世代に「親になるための学び」の必要性も感じている。
- ・ 子どもの発達段階に応じた学習プログラム、将来の親世代向けの学習プログラムについて、議論していただきたい。体系化された学習プログラムを開発して、家庭の教育力の向上を図りたいと思っている。気軽に学習できる、参加体験型というスタイルのプログラムが作成できれば、県内各地で講座を実施することができる。
- ・ 宮崎ならではの「親の学び」を推進していきたい。

森山議長 学校の負担を軽くするという点からも、家庭の教育力、親の理解は大切である。まず、家読について意見を出していただきたい。

長鶴委員 思春期の子どもをもつ親の相談を受けているが、親子の会話が乏しい、また、一方通行的で、循環した会話ができいないと実感している。家読は、コミュニケーションを図る手立てとして突破口になると思う。

思春期の子どもと会話するためには、幼少時期からの親子の会話がないと、いきなりはできない。幼い頃からの会話の積み重ねがないと難しい。このことから家読は大事だと思っている。

宮本委員 家読の取組についての実績や評価について教えてほしい。

事務局 家読の取組が一年経過したので、今後調査を行う予定である。取組としては、県庁内の二か所に家読文庫を設置したり、各教育事務所で読み聞かせボランティアの養成講座などを行ったりしている。県庁内の家読文庫は多くの利用がある。

森山議長 綾町では、家庭での読書を推進するために、全ての家庭に幼児教育として「本を持ち帰る運動」を10年前から展開している。それで小・中学生になっても本に親しむ子どもがたくさんいる。幼児期の本との出会いがしっかりとできると、子どもたちは本に親しみ、家庭で親も子どもも本を読む機会が増える。行政が主導的に行うことも大事だと思っている。

綾町内の子どもは、図書館周辺に集まって遊んでいる。将来は、図書館通いの文化がうまれてくるのではないかと考えている。行政主導も一つの方法だと思う。

山田委員 子どもが小学生の頃、ブックカバーを作ってあげて、本を持ち運びしていた。中学生になると自分で図書室から借りてくるようになった。

長 委員 対象はどの年齢層を中心とするか、絞った方がよいのではないかと。小・中学校ではボランティアの方が読み聞かせをされている。高校生になるとインターネット中心になって、本離れが進んでいる。また、今の社会状況の中では読書をする余裕がないという親も多い。対象を乳幼児期に絞ったほうがよいのではないかと考える。

鈴木委員 ある程度の年齢になると、それまで本に親しんでいなかった子が、いきなり本好きになるとは思えない。やはり、きっかけは乳幼児期かなと思う。例えば、定期健診の時にブックスタートとして絵本を渡したり、読み聞かせの大切さを親に伝えたりして、親も子ども本を読む習慣を付けることが大切だと思う。子どもは読み聞かせで本が好きになる。大事なことは家族で本を読むことである。乳幼児期に、親も子ども本にふれるきっかけを、行政の方からもアプローチしていくとよい。

杉田委員 綾町のように行政主導でやることもよいと思うし、すぐにでもできるのではないかと思う。小学校低学年ぐらいまでは、一人で読書することは難しいと思うので、親と一緒に読んであげないと難しい。それがきっかけで親も読書をするようになる。

行政主導で行うなら、小学校低学年までの時期に、親も一緒に読書をしなさいという啓発が必要である。ただし、「早寝・早起き・朝ご飯」の取組の中で見られたケースとして、親が朝食をつくってくれないときはどうすればよいかという反省もあった。家庭任せにしないで、地域や学校も一緒になって取り組まないとうまくいかないと思う。そこまで考えておく必要がある。



山下副議長 家読は親子のコミュニケーションを図るツールで、それをスローガンとして広げて意識の浸透を図る上では有効であると思う。それができない家庭に対しては、親を責めるのではなく、児童館での読み聞かせなど、地域で補っていく、応援していくという温かい視点も大切である。

黒木委員 子どもが小学生の頃、親が子どもに本を読んであげて、子どもがその感想文を書くという取組があった。週に2回はテレビを見ない時間ができて、よい習慣だったと思う。親にとっては宿題みたいなものであった。家読もやろうと思えばやれると思う。

久保田委員 大切にしたいことなので、強制的であっても繰り返し取り組ませて、習慣にしてほしいと思う。初めは短くて簡単な本から始めて、少しずつ量を増やしていくという方法もよいのではないかと思う。

谷口委員 今も自宅には子どもが乳児の時の絵本、幼児の時の絵本など、それぞれの段階の絵本が残っていて、宝になっている。自分が読んだり聞いたりしたことは記憶に残っている。

昔は「みんなで一緒に家庭読書をやろう」という取組はなかったような気がする。テレビを見ないで本を読もうという時代だったように思う。

幼児期に読んだ本は一番心に残るので、そこから読書好きになるかどうか分かれてくるのではないと思う。読書と出会うチャンスをいつにするのか、年齢によって手法が変わってくるが、大人と子どもが一緒になって取り組まないと、読書離れは解消できないと思う。

白水委員

図書館の利用は、家読を進めるための本を借りるということはもちろんだが、どこで、どのようにすれば、自発的に本を借りることができるのかという学習手段を身に付けることにもなり、大人になっても調べ物をするときなどに生かせる。早いうちから図書館の利用の仕方を学ばせるとよい。自分は、子どもの頃に父親に市立図書館へ連れて行ってもらい、今でも利用している。様々な本がある図書館は、コミュニケーションの場にもなる。

知り合いの子どもに聞いたところ、市立図書館の利用を教えてくれたのは親がほとんどだったので、学校でも市立図書館の利用について、親子に知らせてもらえるとうれしい。本にふれあうきっかけを図書館でつくれるとよい。

野口委員

子どもが小さい頃に親の背中を見せることが大切である。子どもに本を読んであげることにあわせて、親はこの時間にいつも本を読んでいたという姿を子どもの記憶に残すことも一つの方法だと思う。

また、子どもが図書貸出カードを持っていることを誇りに感じる、親や周りの友達がみんな読書に親しんでいるというような環境づくりができるとうい。



森山議長

小・中学校の読書活動の状況と学校から家庭への読書活動推進の呼びかけはどうか。

宮本委員

新富町では、幼・小・中学校でファミリー読書を実施した。協議会を立ち上げ、行政とタイアップした取組は貴重だった。低学年の子どもほど親の関わりが大きい。忙しい親が5分でも子どもに時間を割いてやるような仕掛けをしていかなければならない。

自治会や班など地域の小さな単位の中で声をかけ合い、集まれる仕掛けがほしい。学校でも読書活動の推進のために様々な取組を行っているが、家庭や地域でやれること、学校でやれることを明確にする必要がある。

長鶴委員

家庭読書をコミュニケーションのツールとして考えるとき、同じ場を共有して取り組む方法と話題を共有して取り組む方法がある。

地域での実践や自分の経験などを話題にしながら話をすることで、活動の場の共有はできなくても話題の共有はできる。

場の共有だけではなく、もう少し広げた形で家読を進めていくと、家庭の事情で取組が難しいところでも活用できる。

- 山田委員** 綾町の小・中学校では、三つの実行「あいさつ・手伝い・読書」に取り組んでいる。町の青少年育成大会では、多読賞を設け表彰している。このことは、親の意識を変えるきっかけにもなる。関心の低い親への対応は難しいので、せめて子どもだけでも読書好きにしたいと思っている。
- 森山議長** 次に、「親の学習」の推進について意見を願います。
- 山田委員** 身近な学習機会である家庭教育学級でも、参加する親と参加しない親が固定化されている。参加しない親、家庭教育に無関心な親への対応をどうにかしたいと思っている。
- 森山議長** 学習会に参加しない親、また参加していても話を聞いていない親への対応をどうするかが問題である。家庭でできないことは、地域で対応する必要がある。地域コミュニティの絆をどう深めるかが問題である。
- 黒木委員** 親が多く集まる機会に講演会を開いたり、子ども会と高齢者クラブでゲートボールをしたりするなど、地域でいろいろ工夫して取り組むことも必要である。
- 長 委員** 地域の現状も厳しい。地域づくりに携わっている人は固定化されている。このことは、以前からの課題である。親の意識改革はもちろんだが、将来親になる子どもたちに小さい頃から意識付けることも必要である。その際、参加するだけでなく、参画する意識を持たせることが大切である。
- 森山議長** 今は企業で働いている人が多く、企業の果たす役割も大きい。前回の会議で久保田オートパーツで研修をしたが、久保田オートパーツの社員の方は、地域においても必要とされる人材に育っているのではないかと感じた。地域に役立つ人材が企業でも重要な人材であると思う。
- 久保田委員** 社員教育の一環として東京へ研修に行った。社員には、常に勉強させないといけないと思っている。研修して地域に還元していかないと、会社は生き残れないと思っている。
- 山下副議長** この会議には、様々な分野から人材が集まっている。このような会議は少ないので、知恵を結集し、いろいろな提案ができるとうい。
- 宮本委員** 学習機会を考えると、学校では保護者^{しゅごか}悉皆の健康診断や入学説明会などの機会を活用して講座などを開いている。以前、県教委で父親の意識を高めるために企業と連携して、仕事が終わった後に社員研修などで親としての学習を行っていたが、現在はどうか。
- 事務局** 県で実施しているアシスト事業では、企業が出向いて学習を行っているが、学習する側が出向いていくことも考えられる。いろいろな提案をお願いしたい。

宮本委員 以前、各教育事務所で、企業に出向いての出前講座を実施していた。今はその頃より企業の理解が深まっているのではないかと思うので、父親、母親を問わず、実施できるのではないかと思う。

野口委員 対象の年齢層を絞り込むという意見のように、まずは対象を絞ることも一つの方策であると思う。NHKで開催している「わんわんワンダーランド」は、親子で一緒に歌ったり踊ったりして楽しむイベントで、それに参加している親のパワーはすごいと感じた。
年齢的にパワーのある30～40代の親に対象を絞って、興味関心があると思われる子育てをテーマに取組をしていくとか、考えてみることも必要だと思う。

久保田委員 「三つ子の魂百まで」と言われるように、幼児期の指導が大切だと思う。初めて子育てをする世代に対象を絞ることで、「親育て」「子育て」の両方が可能になるのではないかと思う。

森山議長 教育委員会と知事部局が連携して、私立の幼稚園、保育所も含めて、幼児教育の視点から取組を行うと推進が図られるのではないかと。ある程度は行政主導で親の教育を行う必要があると思う。



長 委員 県と市町村の社会教育委員会議の取組内容は同じなのか。県の社会教育委員会議の内容が市町村へ伝われば取組が進めやすいと思う。

事務局 取組はそれぞれである。例えば、読書活動に関しては、西米良村では「あさよむ号」という村の巡回車が、各家庭に本を届けている。
知事部局との連携については、教育委員会でしっかりまとめた上で取組を進めていきたいと考えている。

鈴木委員 親の出席が多い小規模学校の取組の工夫に学ぶこともある。読むだけでなく、書くことも大切で、「書育」という言葉もある。もう一度家庭で見直すことも必要だと思う。

白水委員 親の学びについては、対象の規模に応じた取組も考えられる。
例えば、小さい規模でいうと、学校のクラスPTAを開き、座談会方式で話し合う。
地域といった中規模では、参加体験型のプログラムは効果的である。
県・市町村といった大規模では、社会教育主事の有資格者が、それぞれの担当業務の中でプログラムを作って持ち寄るなどの方法も考えられる。

長鶴委員 大学の授業の中で、大学生に親へのインタビューをさせている。「親としてのあるべき姿」とか「子育ての際の周囲との関わり」について、エピソードを聞きながら、自分で答えを導き出させるようにしている。

「親になるとは」「家族ができるとは」ということを自分たちで学習している。

自分が育ててもらったエピソードは、生きた教材になるのではないかと思う。このような方法も「親の学習」に取り入れてみてはどうかと考えている。

森山議長 大学生時代にこのような経験をするのが、将来の親学びであると思う。

長鶴委員 自分が誕生した時の話は、小・中学生の時にも同じような学習をしているそうだが、大学生になって、大人になってから改めて話を聞くと、感覚は全く違うと言っている。そうであるならば、親になった世代の人が、改めて自分を育ててもらったことを振り返ると、また違った学びになると思う。



久保田委員 自分も子どもを持った時に親の気持ちがわかった。親から聞くことは大事だと思った。

谷口委員 親同士で子育ての話はするが、大きくなった子どもたちに「親になる」という体験を伝えることも大切であると改めて考えた。

長鶴委員 学生が自分たちから親に聞くということがポイントである。「昔のことなのに、なぜ親は子育てのことを多く語れるのか」ということから、子育ての大事さや思いを感じているようである。また、助産師の立場からは、妊娠したときから親になる学習を段階的に行うことが必要であると感じている。

黒木委員 就学時健康診断の時に子育ての先輩から、教育の視点を含めて話を聞けるとよい。

谷口委員 婦人会では、参観日や就学時健康診断など、機会を見つけて学校に出向いている。家庭教育学級に子育ての先輩の話聞く場をつくってほしいと思う。

宮本委員 横のつながり（同世代の親）で学ぶ機会と縦のつながり（自分の親世代）で学ぶ機会があるとよい。地域の方を含めて行うことで、地域の方にとっても学びの場となる。少人数で参加体験型の学習がよい。

森山議長 家庭の団らんが一番大切である。最近、第3日曜日の「家庭の日」が形骸化している。総合行政で真剣に考えるべきことであると思う。また、スポーツ少年団など、各団体の活動においても配慮すべき問題である。ぜひ、宮崎県で定着させたい。

綾町では、第1土曜日の「少年の日」を子ども会の開催日にしている。
最後に山下副議長にまとめをお願いします。

山下副議長

「家読」については、幼少期から行う仕掛けづくり、環境づくりが必要であるというハード面からの議論と、場の共有だけでなく、話題の共有というソフト面からの議論が行われた。

これまでの議論をまとめる上で「横」と「縦」の議論があると思う。

横の議論としては、教育プラットフォームや目に見えないものも含めたネットワーク形成についての具体的な方策をまとめる必要がある。

縦の議論としては、子育ての先輩方の力を活用したパッケージプログラムの開発などが考えられるのではないかと思う。



森山議長

時間となったので本日の会議を終了としたい。

(終)